

ブレヒトの『イングランドのエドワード2世の生涯』について

友 永 輝比古

要旨：マーロウからすると約300年前の、ブレヒトからすると約600年前の出来事、エドワード2世が即位してから獄死するまでの出来事を、これらの作家は舞台化した。ブレヒトの『イングランドのエドワード2世の生涯』は、マーロウの『エドワード2世』の翻案である。

2つの作品の間には、約330年の隔たりがあり、劇形式、言葉の使い方、台詞回し、人物像等の点で大きな違いがある。逆に、その違いから時代の違いが感じられる。マーロウはイギリスのルネッサンス期を生き、ブレヒトはドイツの激動期を生き、したがって、それぞれの作家の、それぞれ別の時代における世界観、人間観を作品から読み取ることが出来る。

ここでは、2つの作品を比較し、主な登場人物の人物像の違いを述べることにする。

エドワード2世（在位1307年～1327年）を題材にして、マーロウ（1564年～1593年）は『エドワード2世』を1592年に世に出し、ブレヒト（1898年～1956年）は、1923年にフォイヒトヴァンガーと協働して、マーロウの作品の改作を試み、『イングランドのエドワード2世の生涯』を1924年3月にミュンヘンで上演した。本来の上演予定は1923年12月であったが、11月にヒトラー・ミュンヘン一揆が起こったために4ヶ月延期された。

マーロウの作品は、同性愛、不倫、痛烈な教会批判があり、しかもそれぞれの人物たちに、内面の感情の力に任せて、それぞれの思いを朗々と語らせている。宮廷派と反宮廷派の激しい対立を軸に据え、「同性愛と不倫の気憐いムードをベースストーン」にした「偉大な性格と情熱の悲劇」（千葉孝夫解説。以下千葉）である。人間謳歌を感じさせるルネッサンス期の作品と言える。

ブレヒトの作品は、エドワードによる同性愛の対象の召還、王と貴族の対立、王の逃走、幽閉、「譲位」の要求、王の暗殺、首謀者の処刑、エドワード3世即位と、筋の基本路線はマーロウと同じである。しかし、改作と言っても、ほとんど翻案であり、複雑な筋と登場人物の多さは整理され、同じ登場人物でありながら、人物像が全く違う。そこから14世紀に生きた人間を見る、16世紀の人間の目と20世紀の人間の目の違いが感じ取れる。

ブレヒトはマーロウと同じように、幕が開くと、故エドワード1世に追放されていたギャビストン（マーロウではフランスの貴族。ブレヒトでは肉屋の息子）が、後継者エドワード2世の手紙（「私の父、エドワードは死んだ。来れ、ギャビストンよ。君の親友、エドワード2世とこの国を分かち合おう」）を読み上げて、芝居を始めている。たちまちランカスター伯爵及びウィンチェスター大司教（ギャビストンを敵視し、後にエドワードに対して反乱を起こす貴族の代表者）とエドワード2世の間で衝突が起きる。ランカスターとウィンチェスターは、ギャビストンの召還に反対し、もしそのような事態になれば、イングランドは戦いの場になる、とエドワード2世を脅す。

エドワードは、同性愛の対象であるギャビストンを可愛がり、彼をなまざまな高貴な役職につけ、寵臣政治振りを発揮する。さらに、ギャビストン追放の発起人の1人だったコヴェントリー司教の財産を没収し、それをギャビストンに与え、司教を投獄する。

彼は、妻の王妃アンナを徹底的に忌み嫌うほどに、ギャビストンに入れ込み、その退廃した私生活が庶民の笑いの対象になる。王の地位にありながら、王たる品格も威厳も無く、政治的統治能力に全く欠け、エドワードはイングランドを経済的に疲弊させ、対スコットランド戦にも負けてしまう。

腐敗した状況下で、庶民の間で内乱が噂されるようになり、ウィンチェスター大司教は、インテリ貴族モーティマーを持ち上げ、退廃政治の元凶ギャビストンの追放に協力を要請する。エドワード2世の同性愛などに何の興味もなかったモーティマーは、このままではこの国は奈落の底に落ちると、正義感から、古典研究を放棄して、議会でギャビストン追放の提案者になる決心をする。知識人の政治参加である。これが切っ掛けとなって、彼は変身して行き、最後に自身が奈落の底に落とされる。あるいは、自分から落ちて行く、と言っても良い。

議会が開かれ、モーティマーは、一人の女性の取り合いが元で起こったトロイア戦争を引き合いに出し、それがいかに悲惨な結末を招いたかを、雄弁家らしく滔滔と述べ、もし人間的な折り合いがあったなら、トロイアは存続し、「もちろん、イリアスは無かったであろう」と締めくくる。エドワードは、反論も出来ず、ただ泣くばかり。議会は中断されるが、それでもモーティマーたちは、王にギャビストン追放を迫る。しかし王はそれを拒否し、13年戦争が起きる。

ブレヒトは、戦争場面の描写に相当力を入れ、キリングワスでの2日間の戦いを時間単位で11場面に区切っている。それゆえに、局面の変化にスピード感がある。ギャビストンが敵の手に捕らえられて殺されたと、勘違いしてそう思い込んだエドワードは、怒りに狂い復讐心に燃え、一計を案じ和平会談と見せかけて、丸腰のランカスターとウィンチェスター大司教を捕らえ、一挙に兵を戦場に繰り出させ、この戦いに勝利を収める。ランカスターとウィンチェスター大司教は処刑され、モーティマーはキリングワスの戦いに破れた不名誉な生き証人として、放浪させられる。

これはブレヒトが仕組んだモーティマーの誤算である。モーティマーは、貴族たちに戦場で捕らえられたギャビストンを、自分の手に預かり、落ち合う場所と時間を決めて、部下に彼の監視を任せる。ところが、政治的な判断力も行動力も全くない王が、ギャビストンが殺されたと思ひ込むや、突然獅子となって攻勢に出て、大戦闘になり、モーティマーは約束の場所に約束の時間に行くことが出来ず、部下たちはギャビストンを殺害してしまう。エドワードにとって大事なギャビストンは、モーティマーにとって王との交渉で名誉ある地位を得る大事なカードであった。モーティマーの思惑は、計算外の王の変身という出来事によって、失敗する。

放浪の身のモーティマーは王妃アンナと出会う。このときのアンナは、ギャビストンの死を嘆き悲しむ夫エドワードの姿を見て、精神的にきっぱりと夫を切り捨てていた。王妃とモーティマーは互いの不遇を語り、エドワードに対する復讐とその死を誓い合う。

エドワードは、13年戦争後もギャビストンが忘れられず、ロンドンへは帰らずに、放心した状態で戦場に留まっている。そこへスコットランドの軍事援助を得たモーティマーと王妃の軍が攻め入り、エドワードは敗走する。

ニース司教の修道院に逃れたエドワードは、寵臣のボールドックの裏切り（ユダに似ている）

によってモーティマーの追手に捕らえられ、別の場所へと移される。

再びウィンチェスター大司教が登場する。彼は、エドワードに財産を没収され追放されたコヴェントリ司教で、そのエドワードを匿ったニース司教でもあり、今は前ウィンチェスター大司教の後継ぎである。今回の役回りは、モーティマーの命令でエドワードから「譲位」の了解を取り付けることである。エドワードは、内乱の原因が自分にあることの反省もなく、ひたすら没落の身となった自分の不運と惨めさを嘆き、世の「はかなさ」を嘆く。一旦は大司教の誘いに応じて王冠を脱ぐが、しかし、すぐにまた気を取りなおし、と言うか、未練がましく王冠を被る。再度大司教の説得に応じて、エドワードは「譲位」を決心するが、大司教が証人を部屋に呼び入れるや、手のひらを返したように、「いやだ、いやだ、いやだ」と3回叫び、「譲位」を拒否する。その後2年間、モーティマーの策略で、エドワードは幽閉先を転々とさせられる。

今やイングランドのトップにまで申し上がったモーティマーは、後は幼いエドワード3世を王に祭り上げれば、権勢は思いのまま、その身は安泰、と思っている。ところが、貴族たちは、姿を消した王の所在と「譲位」の真偽のほどをモーティマーに詰問し、彼は窮地に立たされる。モーティマーは議会の開催を宣言し、エドワードの退位は会議の場で明らかになるであろう、と言う。

会議が開かれる前に、モーティマーは、のるかそるかの覚悟で、汚水が流れ込む地下牢に閉じ込められたエドワードに会い、「譲位」を王に要求する。だが、エドワードの返事は、「(譲位)するともしないとも言わない」であった。ついにモーティマーは、「殺せ」と読めもすれば「殺すな」とも読める自筆の文書を刺客に渡し、エドワードを殺害させる。

議会が開かれ、エドワード3世はモーティマー自筆の文書を証拠に、父エドワード2世殺害の罪で彼の処刑を命じ、王妃アンナには王の殺害の嫌疑が掛かっているとして、審問のために彼女をロンドン塔に投獄する。

以上がブレヒトの作品の筋であるが、次に同じ歴史上の人物を取り上げながら、人物像の違い、同じ状況における人物の行動の違いを示す。そのことによって、同じ状況における人間の行為の可能性が示されるはずである。

○モーティマー像

マーロウ：モーティマーは、最初からギャビストン追放の立場に立っていて、反宮廷派のリーダー格的存在である。彼は、王と貴族の協調を願う愛国心旺盛な青年で、佞臣ギャビストンにのみ目を掛けるエドワードの寵臣政治が我慢ならず、エドワードと激しく遣り合う「血気盛んな炎の人」、「直情径行にして、誇り高い、典型的な英国貴族」(千葉)である。そのモーティマーが野望を抱き、直接エドワードを敵視するようになったのは、バラブリッジの戦いに敗れ、王によってロンドン塔に投獄される羽目に陥った時である。「え、モーティマーよ、天を望むお前の力を／ぼろぼろの石垣が抑えられようか？／いや、イギリスの禍たるエドワードよ、それは出来ない相談だ、／モーティマーの望みはその運命より遥か高い所にあるのだから」(千葉孝夫訳。以下マーロウ作の訳はすべて千葉)と、イギリスの全権力掌握を心に誓う。そして、彼自身の没落への興隆が始まる。フランス軍の援助を得てエドワード軍を破り、王妃イザベラと共に運命の輪の頂点に立ったモーティマーは、「今や運命の輪を思いの儘に廻せるようになった」と言うが、それもつかの間、国王殺しの罪でエドワード3世によって処刑を宣告される。

その時はじめて彼は運命の輪の意味を認識し、死を潔く受け入れる；「下劣な運命め、今分ったぞ、お前の輪には／頂点があり、上昇してそれを極めた者は、真逆様に転落する他無いという事が。その頂点を極め、／これ以上高く昇る所は無いと分ったからは、／何故己が転落を嘆く要があるうや？」。

マーロウが描くモーティマーは、一旦思い込んだらまっしぐらに没落まで突き進んで行く、単純な熱血漢である。

ブレヒト：マーロウのモーティマーと違って、国王のため国のために正義感に燃える炎の人というタイプではなくて、読書愛好家で、古典に親しむインテリ貴族である。エドワードが同性愛者であることなど、古代ギリシャの英雄にもあったことだと、気にも止めていない。彼は学識があり、歴史から人間を学んでいる。プルタークを読み、偉大なシーザーが相次ぐ戦争に勝利したことについて、

彼（シーザー）を興隆させた者たちが己の荣誉（戦死）を
手に入れた、そのもとはと言えば
人間のいとなみのむなしさについての
そもそもの無理解、その抱き合わせである
驚くべき品格の欠如
要するに、己のうすっぺらさである

と語り、また、「一羽の雄鶏の皮を剥ぎ、食べた者は／…満ち足りると、皮剥ぎが面白くなり／ついには、獅子の皮を剥ぎたいと／そんな欲求に駆られる」とも語る。

ブレヒトは、芝居の最初の段階で、このようにモーティマーを有識者、歴史から教訓を学び取った者、人間に関する知識をもったインテリとして設定しておいて、その彼に名声欲を芽生えさせ、大衆の無知を利用させ、ギャビストンの「皮剥ぎ」（利用すること）から「獅子（エドワード）の皮剥ぎ」（権勢欲）への道を歩ませている。そのことによって、物事の分っている人でも変わり得る、という事が観客に示されることになる。

モーティマーがウィンチェスター大司教に乗せられて、議会でギャビストン追放の提案をするのは、「一匹の犬（ギャビストン）に、帽子で地面を掃くようにして、最敬礼する連中がいる限り、国民はこの島を奈落に突き落とす」という動機から出たもので、これは瞬時的正義感に燃えるインテリによくあることである。

モーティマーが最初の変化を見せるのは、戦場で捕らえたギャビストンを処刑すべきか、エドワードの要請を受け入れて、王に一目会わすべきかを、貴族たちが議論しているときである。その様子を離れた所から見ていたモーティマーは、「奴を吊るすな。王にも渡すな」と叫ぶ。彼には心中ひそかに思うところがあった。

奴を、もし生かして、スコットランド半分の値打ちがあるなら
俺のような人間なら（エドワードの頭が良ければ）、軍隊すべてを
この蒼白の助惣鱈（ギャビストン）と交換に、提供するだろう

モーティマーの思惑は、ギャビストンをエドワードに渡し、その交換条件として、イングランド軍の将軍となって、スコットランド遠征の名誉を得ることであった。知識人モーティマーの心に、眠っていた私的な名声欲が目を覚ました訳である。「この肉屋の息子（ギャビストン）は戦争の始まりであり／しかしその終わりでもある。／泥沼から抜け出る綱、矢から身を護る盾でもある」、俺は「奴（王の急所）を押さえている」、「肉屋の息子の皮にこの身を包んでやる（利用する）」と独白する。

マーロウでは、再度追放されたギャビストンを呼び戻すことに同意したモーティマーたちに、エドワードは名誉ある地位を与えている。老モーティマー（ブレヒトの作には登場しない）はスコットランド遠征軍の将軍に、モーティマーはイングランドの陸軍元帥に任じられている。ブレヒトは、結果として名誉ある地位を与えるのではなくて、人間にありうる行動の一つの可能性として、モーティマーにそれへの野心を起こさせるという、アイディアを取り入れたのである。

第2の変化が見られるのは、王妃アンナと共に、エドワード王を打倒し、政権を手に入れることを誓ったときである。これ以降、ブレヒトはモーティマーを、知識人たるかけらもない権勢欲丸出しの策士、詭弁家として描き、大実力者たる振る舞いをさせるも、エドワード3世に処刑を言い渡されると、命乞いさえする俗物に成り下がらせている。

生かしては貰えないと分ったモーティマーは、開き直り、「乳臭い雛っ子に命を乞うぐらいなら、死んだほうがましだ」と言って、インテリらしく、あるいは、インテリの面目を保つために、次の最後の台詞を残して退場する。

雛っ子め、これが放埒な運命の女神が廻す
輪だ。それはお前を上昇させる。

上へ、上へとな。お前はしっかりとつかまっている。上に向かって。

さあ、一点にたどり着く。それが頂点だ。そこから先には

さらに高く昇る梯子はない。お前は転落して行く。

輪が廻っているからだ。いいか、これが分った者は
落ちるのか、それとも落とされるのか？この問いは
面白いぞ。よく味わえ！

マーロウでは、「その頂点を極め、／これ以上高く昇る所は無いと分ったからは、／何故己が転落を嘆く要があろうや？」となっている。マーロウは反語表現で、モーティマー個人の宿命を語り、ブレヒトは疑問表現で、個人が歴史を動かすことの出来た時代のあり様を語っている。運命の輪に関しては、後のブレヒトの戯曲『まる頭ととんがり頭』（1932年～1934年）の中に詩「水車のバラード」があるが、そのリフレイン部分ではっきりと民衆の視点が入り込められている。

むろん水車はまわりつづける

上にいるものはいつまでも上におれない。

だが、下の水は、悲しいかな、いつまでも水車を廻しつづける。

○エドワード2世像

マーロウ：エドワードは、反宮廷派の貴族と激しく舌戦を展開するが、それは権力の座にある者の権威、威信を示すだけの空いばりに過ぎない。国家を私的所有物のように見なし、意のままに振る舞う。しかし、統治能力も責任感もなく、ひたすら国を滅ぼす佞臣を処遇する。我を通す強さがあれば、弱さがあり、外圧に強く押されると、ギャビストン追放に同意するし、「譲位」に同意する。

マーロウは、およそ王たる資質を持ち合せていないエドワードを批判的に描きながら、後半部、敗北してからの逃走、幽閉、獄死の場面では、王の悲運に観客の同情心を誘うように描いている。

ブレヒト：彼が描くエドワードは、体は大きいがまるで子ども（統治能力がない）。議会でモーティマーに諭されて、泣きじゃくる王。ギャビストン追放を迫るモーティマーたちに何も言い返せず、駄々を捏ねる子どものように、「いやだ、いやだ、いやだ」と言って拒否するのが精一杯である。幽閉中のエドワードは、前半と違って実権を失っていても王の威厳を示している。一旦「譲位」しかけたが意を翻し、王冠（エドワードにとっては私有物）を渡すことを王としてきっぱりと拒否する。モーティマーが直接交渉に臨んだ時には、イエスともノウとも言わない態度をとる。ブレヒトは、マーロウと違って、人間の行為の可能性として、前半でも後半でも、エドワードに外圧に屈しない態度をとらせたが、専制時代の君主に当然あっていい態度、と考えたからであろう。

○王妃アンナ（マーロウではイザベラ）像

マーロウ：王妃イザベラは、ギャビストンを偏愛するエドワードに忌み嫌われながらも、エドワードを愛し、取り戻そうとする貞淑な妻である。しかし、モーティマーとの間では、ほんのりと甘酸っぱい香りが漂う。

後半イザベラは変身する。彼女はモーティマーと手を組み、フランスの軍事援助を得て、エドワード軍を敗退させ、以降、王妃は悩み事なく、絶頂期の武将さながらの物言い振りで、臣下にてきぱき命令を下す、生き生きした女性である。モーティマーとの関係も蜜月のごとくうまく行っている。二人にとっての唯一の弱点は、エドワードの存在である。実権を失っているとは言っても、王は王。「譲位」したとは言っても、夫は夫。行方不明のエドワードの所在を知らながら、人前では知らぬ振りして、平然と王の身の不運を嘆き同情して見せ、モーティマーに夫殺しをほのめかす、したたかな女性でもある。

ブレヒト：恋敵ギャビストンが殺害されるまでのアンナの姿は、マーロウと同じである。ただ、モーティマーとの関係は、マーロウのような甘い香りはない。「妻であって、妻でない」内なる悩みを打ち明けるアンナに、モーティマーは「奥方様、涙に明け暮れるのは、お肌によくはありません／…ご自身をお慰めなさい。生肉は／いつも、濡れていたがるものです」と、慰めの言葉とも、誘いの言葉ともつかないきわどい言葉をかける。アンナは独白で、

哀れなエドワード様、あなたはこれほどまでに私を虐げなसार。

彼が淫らにも私に襲いかかれば

私は彼の顔を叩く訳にもいかず
じっと耐え、ただ立ち尽くさねばならぬとは。(大声で)
モーティマー、あなたは惨めな私を食べ物になさるのね。

と語る。ここで二人の後の関係が暗示されるが、淡い愛の芽生えと言えるロマンチックな雰囲気はない。

後半のアンナは、マーロウのイザベラのように、生き生きした、しかもしたたかな女性ではない。彼女の生活は、蜜月どころか、王妃の地位にありながら、人生落ちるところまで落ち込んだ、乱れずさんだ生活である。王に対する反逆、不倫、親殺しにも等しい夫殺しの罪の深さから自身を苛み、「このウィンチェスターの壁紙の間から、殺された雄鶏の匂いがする」と不安をおびえている。昼間から酒を呑み、食べることで気を紛らわせ、モーティマーが注意しなければ、息子エドワード3世の前でも、胸を開けたままである。「寝ている時にも食べ、何かぶつぶつ言う。それがいやなんだよ」とモーティマーは、完全にアンナに手を焼いている。

彼は、幼いエドワード3世を早く王に祭り上げて、安泰を確保したいのだが、アンナは「あの子はやめて(王にすることを) / …あなたが魚を獲る、いかがわしい網に絡めるのは」と、モーティマーの国づくりに我が子を抱き込むことに抵抗し、子を思う母親として、人間としての一面を覗かせる。しかし、彼女はなすすべを知らない。

例え何が起こったせよ、そしてこれから起こるにせよ
神はお許しになられよう、あるいはお許しにならないかも知れないが
私はあなたの血を味わった、だから私はあなたから離れはしない
何もかもが崩れ落ちるまでは。
それまでは、書くなり、署名するなり、命令するなりなさい、
あなたのお好きなように。私が保証します。

と言って、彼女は笑う。「なぜ笑うのか」とのモーティマーの問いに、アンナは「私が笑うのは、この世が無だから」と応える。投獄される前に、彼女が息子に残す最後の台詞は、

お前はこの世の何を知っていると言うの
この世には、冷酷な判断、正義ほど
非人間的なものはない。

である。ブレヒトの王妃アンナ像は、エドワードと結婚したが故に、世の辛酸を嘗め尽くし、人生を台無しにし、この世の何たるかを悟った女性像である。

○司教像

マーロウ：登場する主な宗教関係者は、カンタベリ大司教、コベントリ司教、ニース修道院長、ウィンチェスター司教の4人。

その中で先ず最初に登場するのはコベントリ司教で、彼は、ギャビストン追放を提案したということで、エドワードに財産を没収され、投獄される。カンタベリ大司教は、エドワードが

ローマ・カトリック教会に敵対行動を取ったことに腹を立て、議会を開催して、ギャビストン追放をエドワードに迫る。宮廷派と反宮廷派の戦闘に、大司教は加わっていない。敗北して逃げる王を匿う修道院長はエドワードに同情的。ウィンチェスター司教は、幽閉先の王に会って、「譲位」の同意を取り付ける役。最後に、以前モーティマーに組したカンタベリ大司教が涼しい顔をして再び登場し、エドワード3世の戴冠式の開会宣言をする。教会としては、ごく当たり前の活動が描かれている。しかし、ルネッサンス期にあったマーロウは、教会に対して極めて批判的で、エドワードに「何故国王たる者が坊主に服従せねばならぬ？／あんな横暴な下郎共を育てている傲慢なローマよ！／…お前の迷信に充ちた燭光の故に、／お前の建物を破壊して火を放ち、否応無しに／教皇宮の尖塔を卑しい地面に口付けさせてやろう！」と、痛烈この上ない言葉をローマ教会に浴びせている。

ブレヒト：登場する主な司教は、前半のウィンチェスター大司教、コベントリ司教の2人。マーロウでは様々な局面でそれぞれ個別の司教が登場しているが、ブレヒトでは、コベリント司教、ニース司教、後半のウィンチェスター大司教を一本にまとめ、一人の同一人物にしている。前半のウィンチェスター大司教はモーティマーと同じ陣営にいて、暴力にも手を染める。後半のウィンチェスター大司教は、モーティマーに不利な証言をする。ブレヒトの意図は、内なる感情の力に任せて教条的宗教を批判するのではなくて、教会の社会的機能を歴史的に批判することであった。「教会は、神が共にいる人と共にある」、「神は、勝利者と共にあった」と、後半のウィンチェスター大司教は窮地に立つモーティマーに冷ややかに言う。

最後に：

ブレヒトのこの作品は、彼が20歳の時、1918年（第1次世界大戦最後の年）に野戦病院の衛生兵として徴兵され、後方支援活動をした時の体験が、色濃く反映している。次々と病院に送り込まれてくる兵士たちの悲惨な状況を見て、戦争の意味、人と人が殺し合うことの意味、殺し合うことが人生になっていることの意味、寿命を全うせずに「兵士の手にかかって果てる」ことの意味を、ブレヒトは考えたであろう。兵士たちは、祖国のために死ぬことは榮譽である、と教えられていた。榮譽の数が多いほど、犠牲になった市民の数が多い訳である。市民は、戦争という人間の行為の無意味さを認識していないが故に、戦争に参加して榮譽（戦死）を手にするのである。要するに、物事を真剣にまじめに考えない「うすっぺら」な頭であるが故に、戦死と引き換えに榮譽を貰う訳である。市民の犠牲の上に名声を得、権勢を欲しいままに出来るのは、ごく少数の者だけである。

恐らくブレヒトはそう考えて、古代ギリシャの古典『英雄伝』と『イリアス』を引き合いに出し、それらを彼自身の歴史的な目で批判的に見て、シーザーの興隆は何によるものであったかを語り、ひとりの女性を奪い合うために膨大な犠牲者を出したトロイア戦争を語ったのであろう。大衆の無知とその犠牲の上に、権力者の落ちるか落とされるかの交替劇があった、とこれまでの歴史イメージが作品から浮かんでくる。

ところで、王妃アンナの最後の台詞「冷酷な判断、正義ほど／非人間的なものはない」は、今もってアクチュアルな意味を持っている。なぜなら、21世紀に入っても、寛容の精神は機

能せず、互いの正義と正義が暴力でぶつかり合い、多くの市民が犠牲になっているからである。一体何世紀になれば、無実にして武器を持たない市民が、正義の名によって死ぬことのない、そんな時代が来るのだろうか。

使用テキスト：

Bertolt Brecht, "Leben Eduards des Zweiten von England", in *Bertolt Brecht Große kommentierte Berliner und Frankfurter Ausgabe Band 2 Stücke 2* (Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag 1988)

クリストファ・マーロウ著、千葉孝夫訳『エドワード二世』 北星堂書店 1980

* マーロウ作に関する台詞の訳及び解説文の引用はすべてこれによる。